# 阪神淡路大震災と都市火災

## はじめに

神戸大学教授　室崎益輝

1月17日、兵庫県の淡路島の北端を震源域とする直下型地震が発生した。大都市の近傍で大規模地震が発生したため、阪神および淡路を中心に多大な被害がもたらされることになった。家屋の全半壊は20万棟を越え、死者も5,500人を越えた。こうした数字をあげるまでもなく、その与えた間接的影響も含めて考えると、戦後最大級の歴史的な災害であることは確かである。筆舌に尽くしがたい悲惨な現状を見るにつけ、無念さと悔恨の情とが入り混じった複雑な気持ちになる。どうして神戸なのかと、身近で起きたことを恨めしくも思われる。といっても、最前線で奮闘した消防士や消防団員の気持ちに比べると、私の気持ちなどものの数にも入らないであろう。消防職員の口惜しい気持ちを晴らすためにも、安全で安心できる都市づくりに邁進しなければと思う。少し感傷的な書き出しになってしまったが、今後のために今回の地震からしっかりと教訓を汲み取らねばならない、ということである。

## 地震火災の概況と特徴

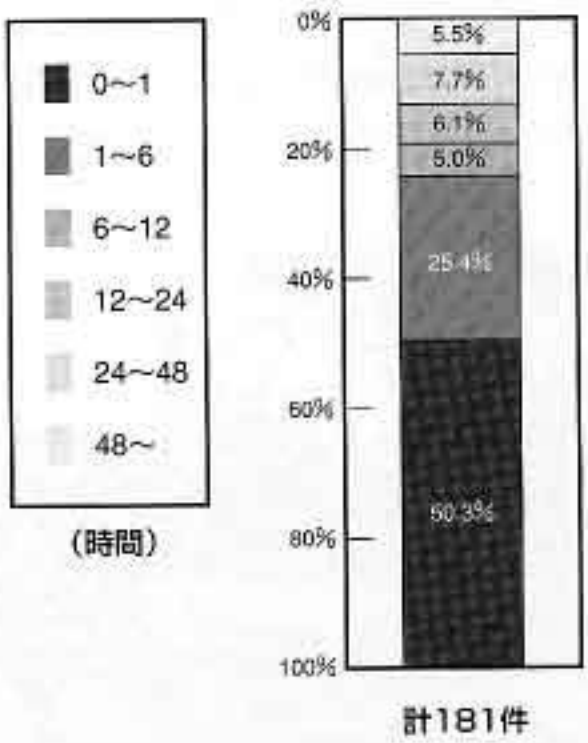
地震後に発生した火災の実態については、現場で消火などの支援活動に参加された方もあり、よく御存知のことと思う。それゆえ釈迦に説法かも知れないが、地震によって何が起きたのかを再確認する意味で、地震火災の概要を簡単に整理しておきたい。なお、ここでの概要は、私達の個人的な調査(1)(2)にもとづいて記述しており、公式記録とは数値等で異なるところがあるが、お許し願いたい。

### (1) 多数の火災が同時に発生した

地震直後から翌々日の19日までに、被災地域である兵庫県南部で約180件の火災（出火件数ベースで算出）が発生している。阪神間の7市について出火件数をみたのが表1である。これによると、灘、中央、長田の3区と芦屋市で人口あたりの出火が多かったことがわかる。

さて、今回の火災の発生の一つの特徴は、地震直後だけでなく数時間後あるいは数日後にも地震と関連した火災が多数発生したことである。半数の火災は地震直後からの1時間に集中しているが、他の半数は1時間以上経過してから断続的に発生している（図1）。

消防活動との関係で問題になるのは、消火の必要な炎上火災が同時に何件発生したかである。大火が発生した神戸市について、少し詳しくみることにしたい。神戸市消防局の監視カメラの映像では、7時30分時点で市街地部に25件程度の炎上火災が確認されている(3)。また、私達の研究室の聞き取り調査(1)の結果によると、地震直後には少なくとも約40件の炎上火災が発生していたことが明らかになっている。「灘区管内で直後に発生した17件の火災に対し初動時に対処できたのは4件にすぎなかった(3)」という報告にも示されるように、公設消防の対応能力を越えた数の火災が同時に発生したことが、大火という悲劇の始まりであったことを確認しておきたい。




図－1　時刻別出火件数